

角田 幸吉 先生の面影

清水 虎雄

故東洋大学教授角田幸吉先生が永逝されてすでに二年有半が過ぎた。激動する内外の情勢、とりわけ国内における深刻な大学紛争がわが東洋大学にも波及する今日、常に学生に対して温情を以て接し、適切な批判、指導を怠らなかつた先生を懐うこと切なるものがある。

先生は明治二十九年五月二十七日、宮城県渡波大浜（現在石巻渡波）の近村で出生された。そこは山が海に迫った人口の少い村であつて、小学校も分校に通う外はなかった。「少年の夢」と題する随筆の草稿の一節には少年時代の環境が切実に描写されている。

夕方さびしく家に帰る。三キロもある山道である。

俄かに風に混つてミゾレ雪が降つて来た。人通りは全くない。下駄の鼻緒が切れて仕舞つた。風がひどくミゾレが雪に變つて寒さが厳しくなつて来た。

凍えるような手に下駄をぶらさげて、足袋はだしで山道を辿る。途中数ヶ所に杉の林がある。周囲は真暗になつた。魔物に吸い込まれるような恐ろしさを感じた。家まではなお遠い。

不安でたまらなかった。その時母が途中まで迎えに来てくれたのでほっとした。母は「今日どうして遅かった」
こう云って私の頭の雪を払いのけ、雪グツにはきかえさせてくれた。

そのときの母の姿が今日なお目に浮んで来る。

少年の夢は何であつたろうか。「末は博士か大臣か」であつたかも知れない。しかしそれは単なる夢想到に止まらなかつたであらう。厳しい環境の中に不屈な闘魂が育くまれていたのである。先生の幼少時代は御両親の愛に暖かく包まれていたようである。成人の後学問の道を選び、法学の中でも親子法論を終世追求研究されたのも偶然ではないと思われる。

大正十年七月法政大学専門学校法律科を優秀な成績を以て卒業、翌大正十一年弁護士試験に合格、弁護士を開業、人権擁護の第一歩を踏み出された。

昭和十四年から二十二年まで母校法政大学の教授に聘せられ、その間昭和十八年法政大学から「日本親子法論」のすぐれた業績に対し法学博士の学位を授与され、学界における地位を確立された。

昭和二十年終戦後の混乱の世相は先生をして象牙の塔に閉ぢ籠ることを許さず、自ら日本再建の道に挺身させることになった。昭和二十二年四月二十九日衆議院議員に当選し新憲法下最初の第一回国会に臨み初代人事委員長として活躍されたのは、先生の鬱積した志をも伸ばす好機会であつた。昭和二十四年一月の総選挙には衆議院議員に再選され、裁判官弾劾裁判所長に選ばれて、裁判官の正しい任務遂行の確保に寄与された。これも先生の志に合致したことであらう。

先生は政治家としての資質にも豊かに恵まれていたと考えられるが、本領は矢張り教育者として、学者としての生活にあることを感じられたのであろう。やがて教壇と研究室に戻られることになった。昭和三十一年東洋大学法学部創設に参画されて以来、専任教授あるいは大学院私法研究科専任教授として易質に至るまで在職されたのである。

先生の学問的業績の深さについては贅言を要しないので省筆を許して頂き度いが、我々の印象に深く残っているのは、青年学徒は若い内に外国の社会法制にも習熟しておくことが望ましいとされて、個人的努力により、本学卒業生に他大学卒業生をも併せてドイツ留学を実現され、昭和三十一年、四十年、四十一年にかけて二十名程の学徒が先生の恩恵を受けたということに見られる先生のすぐれた着眼点と愛情の深さであった。

昭和三十六年には東京弁護士会人権擁護委員会委員長に就任されたが、正義感に富み、人間性豊かな先生として此上もない適材適所であったと思われる。昭和三十一年十二月三十一日神奈川津久井町で発生した一青年家畜商の急死につき、当局は事故により過失死と認定して葬り去ったという事件があったが、五年を経た後、本人の父親から人権擁護委員会に殺人の疑いがありとして、提訴されたので、先生は委員長としてこれを取り上げ、東京高等検察庁へ再捜査の申入れをされて、被害者及びその家族の人権擁護のため熱心な活動をされたのは今当記憶に新たなものがある。

平素血色もよく逞しい肉体に恵まれ、自らも「僕はまだ二十年位は活躍するよ」と語られ、自他共に健康体と信じ、当六十九才の活動体であった先生の生命をむざんにも奪った悪疾は癌であった。その病状については中野長政教授の手記に詳らかであるから、ここに採録する。

昭和四十年三月二十八日直腸癌の病魔に襲われ三九年にわたる闘病生活に破れ去って逝った作家修業の私の妻堤

木曾子の通夜に先生は態々お詣りに来て下さって、心から故人の霊を慰さめ、私に向って「癌では致し方なかった。残念だと思うが、何とか君も立ち直って落胆しないようにして呉れ」と心からの慰さめと励ましの言葉をいただきたい先生が、それから半年余の後の十一月二十日過ぎ、先生ご自身が頸部癌の発病で築地の癌研附属病院で入院手術を受けられるとは神ならぬ身の知る由もなかった。

先生の頸部癌の手術は成功で頸部腫瘍の摘出は完全であり、翌四十一年二月十五日に退院なさって小康を保たれたが、淋巴管を通っての身体背部の転移には勝てず、それから一カ月を経ずして三月二日再発病のためお茶の水の順天堂大学附属病院に入院され、旬日を経ずして四月七日夜眠るが如く逝かれた。先生は最後の時までご意識は明瞭であったとご遺族から伺った。

癌研附属病院での手術にご成功なさって退院される二日前の夜、先生のご病宅に御見舞いに伺った際、先生はベットの傍らの椅子に座して血色のよいお顔色で私を迎えて下さった。「僕は病院でも勉強しているよ」と云われ、原稿用紙に走り書きをされていた。私はぶしつけにも「先生は癌ではないですか」とおたずねした所、先生はいっもの豪放らしいく調子で「君の奥さんの病気とは違うよ」と坦々たる調子で話され、そのお元氣さに私自身恥じ入った次第であった。（終）

先生の永逝は惜しみても余りあるが、今は先生が心に掛けられた一つと思われる東洋大学法学部の教育研究の充実に向上に私共の微力をつくすことを誓って先生の霊を慰める外は無い。

（東洋大学法学部部長
東洋大学法学会々長）